LIBRARIES
UNIVERSITY OF WISCONSIN–MADISON

蝦夷風俗彙纂 = Ezo fūzoku isan. [Series 2, vol. 6] 1882

[s.l.]: [s.n.], 1882

https://digital.library.wisc.edu/

http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

728 State Street | Madison, Wisconsin 53706 | library.wisc.edu

蝦夷風俗彙纂後編

六

CHESTER S. CHARD

蝦夷風俗彙纂後編巻六目次

○工業
舩製作の事
弓箭製作の事
百工
鍛治及鞴の事
樺皮にて笠等を製る事
煙管を製る等の事
靴を製せる等の事
○器械

兵器の事
古器の事
金字塊の事
ヱモンの事
蝦夷象眼の事
シユトの事
食器の事
土鍋の事
酒瓶の事
酒器の事

蝦夷笛の事
蝦夷琴の事
蝦夷器物の事
唐太器械の事
小兒を入置器械の事
麻苧を仕懸弓の繩ゟ用る等の事
海馬皮を繩の代ゟ用る事
器具ゟ關る草木の事

蝦夷風俗彙纂後編巻六目次終

蝦夷風俗彙纂後編巻六

○工業

○船製作の事

凡夷人は舟を作るゝハ。舟敷をもて其基本とし。志のるゆゑゝ。舟つくらんとすれバ。まづはじめゝ山中ゝ入て。敷となるべき大木を求る事なり。其山中ゝ入んとする時ゝ。のさりてゝかゝらバまづ山口ゝて。イナヲをさゝげて。山神を祭り。崎嶇岩嶢（キクセウケウ）はみちを歴るど

いへども。身ゝ恙かくかゆゝ猛獸ゝ害ゝ所のそざる事等を祈るなり。其祈る詞ゝ。キムン。カモイ。ヒリカノ。イカシ。コレ。と唱ふ。キムンゝ山をいひ。カモイは神をいひ。ヒリカゝ善をいひ。ノゝ助語なり。イカシゝ守護をいひ。コレゝ賜まといふ事ゝて。山神よく守護賜まといふ言なり。かくゝ如く山神を祭り終りて。夫より山中ゝ入かり。木を尋る時のみゝ限らず。ゝべて深山ゝ入んとゝまゝ。右のまつりをなゝ事。夷人の習俗なり。夷人の境極北邊陲ゝ地ゝして。舟等をつくるゝとき。多くゝ冱寒風雪の中ゝ在て。其艱險辛苦のそおはど

しきなり。さて山ゑ入舟敷とおもへべき良材を尋求め。尋得るゑ及で。その木を下ゑ至り。まさイナヲをさゝげて地神を祭り。それ地の神よりこひうくるゑり。其祭る詞ゑ。シリ。コル。カモイ。タン。チクニ。コレと唱ふ。シリを地をいひ。コルを主(ツカサル)をいひ。カモイを神をいひ。タンを此といふ言。チクニを木をいひ。コレを賜迄といふ言ゑて。地を主る神此木を賜迄といふ言なり。ゑの祭り終て後其木を伐とるなり。敷此木のみゑ限らず。もべて木を伐んとすれば。大小とゐゑ其所の地神を祭り。神ゑゑひ受て後伐りとる事ゑり。是又夷人

の習俗ふり。木を伐倒しそのまゝ株のかさならにおきて。先敷を作るふり。されども舟は善惡をたゞ此敷ふよる事ふて。そのつくりゆうさとに容易ふらぶ。さいふてまづそのかたちの大概を作るなり。船敷の大概を作り終りてより。其伐取し木は株ならびふ梢ふ。イナヲをさゝげて木の精を祭る。其祭る詞ふ。チクニ。ヒリカノ。ヌウハニ。チツプ。カモイ。キ。ヤツカイ。ウエンアンベ。イシヤムヒリカノ。イカミ。コンと唱ふ。チクニは木をいひ。ヒリカは善(ヨシ)といふ言。ヌウハニは聞といふ言。チツプは船をいひ。カモイは神をいひ。キは爲は

をいひ。ヤツカイそよりてといふ言。ウヱンアンベを
惡き事をいひ。イシヤムをなきをいひ。ヒリカを上ゐ
同じ。イカシを守護をいひ。コレを賜まといふ言ゐて。
木よく聞け舟の神とはれゐよつて。惡事ふくよく守
護さまはれといふ言なり。されを夷人の心ゐおよそ
精ある物ゐはゐとぐく魂魄なりとおもへさるゐよ
りて。無情の木ゐれどもかくイナヲをさゝげて祭り
をなし。其伐とりしゐとををのべて尊敬をるなり。
魂魄を夷語ゐラマチと稱を。草木だゐかくのゐとく
なきバ。まして有情は禽獸ゐど殺をときを。其精とま

つる事甚ぶ厚し。木は精を祭る事終りて。その大概作
りたる船敷を。山中より出し住居のうさそらに移し
置て。夫よりつくり立るの工夫あかゝるなり。まづ舟
敷の兩縁のうちに横木をいき。内へ志ぢまざるやう
にあし。まゝ舳艫ゑ筵やうのものをつくまき。ひゞ
の入損ぜざるやうにして。幾日といふ事おく日おさ
らし置なり。其木のよく〳〵乾きかゝまりて。ゆゞみく
るひ等は出ざるをまち。夫より地ゑ角木ならべ敷。其
上ゑ敷をきる。うちゑ大小は石を入。きゝりの穏らな
るやうゑあし。さて水を十分ゑあるあり。此水はおも

むきみて。舳艫兩縁より初め。さべて形の善惡をかんがへ。その外水上往來の遲速。波濤を渡るの便利。ゐるひを出岸着岸。又は陸みちのげおろしの事等まで。巨細み舟は樣子を熟慮して。その高低曲直を漸々削りなおりおり。さべて夷人の境。いまゞ規矩といふものもならば。かゝる工夫はみなてつくり出せるゆゑ。ぱゝろと勞し思ひ凝し。數月をかさぬるみならばしてハ。數ひとり作り得る事もならざるなり。そのうち月日をかさね。纔み作りたる數みも。かれこれ迄は便利ゐしれば。徒みさつるもありて。其辛苦を極る事。言葉み

盡しがさし。

船のみよしを。夷語ニラフシヨフイタと稱す。ラフとも羽敍いひ。シヨフとも付る事敍いひ。イタも板をいひ。羽をつける板といふことにて。みよしハ左右ハ羽板をつける所ゆゑ。かくいへるなり。夷地の内所の風俗ニ寄て。其形もまさ少しくかゝるなり。船の艫をトタテといふ。されまさ所ニよりて形も替り。名も同じからざるなり。羽板も夷語ニチプラブイタと稱す。チプも舟をいひ。ラブも羽をいひ。イタも則板の事ニて。舟の羽板といふ言なり。舳ニ出る板をナム

シヤム板と稱せナムとも舳を云。シヤムも出るといふ言なり。艫より出る板をウムシヤム板と稱せウムとも艫といひ。シヤムも前と同じ言なり。

目塞ぎを。ヒシラリツブと稱ス。ヒシも物の間隙なるといひ。ラリもふさぐをいひ。ブも器物をいふ。間隙をふさぐ器といふ言なり。夷人の舟も釘を用ひず。みな繩にて縫合せる故。板と板とのなのひゞ。せきまある事なり。依て苔を下におき其上へ木をなして。繩にて縫合せるなり。苔は草とたゞひ物のせきまなどになつるにもやそらつにて。本邦の工家に用る巻檜皮(マキダ)と。同じ

さまゝ用ひらるゝ故なり。苔を夷語ゝムンと稱せ。ムンとは草は事なるを。夷人苔をも草とたゝ同じ物と覺えさるゝよりて。かくゝいふなり。其縫合せる繩を。夷語ゝテシカと稱せ。

ゐのぢら木を。夷語ゝキウリと稱ス。此語解しがたし。尻岸内より廣尾までは舟ゝを。多くこれ具を用ひず。廣尾より國後までの舟をおとゝく此具を用ふ。是を北海ゝよる程。風波ゐらきゞゆゑゝ。舟は堅固ならん事は疑なきなり。尻岸内より廣尾までハ。さのみ北海ゝゐらゞしして。風波は去のゆゑゝまき

まハさは具を用る舟もあるべき。多くハ用ひず。
前まいへるテシカも。船を造るまに板を縫合せるは繩
をのみ稱るまかぎらず。木をとぢ合せる事をもいひ。
又筵などをあむ事をもいふ。カも糸は事まて。物をと
ぢ合せる糸といふ言あり。テシカまハ三種あり。一種ハ
ニベシといふ木は皮をもぎ繩とおして用ふ。一種も
櫻の皮をもぎて其まゝ用ふ。一種ハ鯨のひげをへぎ
て其まゝ用ふ。さの三種のうち鯨のひげ殊ハ。多く廣
尾より國後迄は舟まに用ふ。尻岸内より廣尾までの地
は。鯨殊とる事まれなる故まに。用る所のテシカ多くハ

櫻とニベシとは皮をもちふ。
船は製作全く整ひてはちイナヲを舳ゝ立て。舟神を
まつるなり。舟神を今本邦船師の語ゝ船靈(ふなだま)といふが
ごとし。其祈る詞ゝ。チブ。カシケタ。ウエン。アンベ。イシ
ヤム。ピリカノ。イカシ。コレ。と唱ふ。チブを舟线いひ。カ
シケタを上ゝといふ言。ウエンを向しき事をいひ。ア
ンベを向る事をいひ。イシヤムをなき事をいひ。ピリ
カをよきをいひ。イカシを守護を云。コレを賜ふと
ふ言ゝて。舟の上向しき事向る事なく。よく守護を賜
へといふ言なり。六の舟神を祈る事をたゞ舟上は安

穏を願ふ比みよならぶ。ならたにつく迄る船ふ。神靈をま祈き移さといふさ〳〵ろもなりて。さとゞく意味なる事なり。

是よてまづ舟比製作も全く備るなり。さ迄より後ふいふ器具も。皆舟中ふ用る所比ものにして。此品々さてのひてより海上を走る事も渡る事もなるなり。

本邦よて船を漕ためふ。櫓をもめ入べき船縁ふある。木製の乳の如きものを。タカマチと稱ひ。タカマを跨ぐ事をいひ。チを比べて小さき物比高く出たるさと

乳の如くなるといふ。此タカマチと稱する言其義いまゞ詳ならゞ。夷人のいふとおろを。舟をおぐゝなのぞら木はなる舟を。夫ゝ左右の足をふみなて。左右はタカマチゝ。カンチをさしこみ。跨り居ておぐ。なゞら木はおきを。舟底ゝ横木を入。夫に足を蹈かけ跨りゐてこぐ。何ぞまさがる所の左右のふちに。乳のおとく高く出てたる物故。まさがる乳といふ心ゝて。タカマチと唱ふるよしなりざれども此義さだのある解とゝ思それゞ。

櫂の事をカンチと稱し。左右のタカマチゝさしおみ

て舟をこぐ。奥羽の兩國ならびに松前等は漁舟に。此具を用ふるものにて車櫂といふ。おきなそは形櫂に似て。左右の手にてまそし〳〵水をおぐ事。車はめぐるごの如くなるゆゑに。かくいへるなり。

本邦の船に用ふる櫂とおなじ事につかふ物を。アシナブと稱せ。アシナとは水をかきて舟をはゝむる事をいひ。つは器をいひて。水をかき船をはゝむる器と云ふ事なり。奥羽の兩國ならびに松前等の漁舟に。此具を用るものにて祝りがいと稱ず。但し是もかぢに用ゐぞりに限らず。時によりてかいの代りとなな

也故の名なるべし。
帆の事を。夷語ニカヤと稱ス。夷地ニ生るキナといふ
草ニて作り。筵のごときものなり。帆をカヤと稱する
事。其義いまゞ詳ならず。
ものとりの事を。夷語ニワツカケブと稱ス。ワツカを
水をいひ。ケをとる事をいひ。フを器をいふ。水を取器
といふ事なり。奥羽の海邊ならびニ松前等ニて。右ハ
形したるものかとりを。ヘケと稱ス。是を夷語ニ解する
ニハ水をいひ。ケをとる事ニて。水とりといふ言ふ
り。水を夷語ニハともいひ。ワツカともいふ。今の夷人

を專らワツカとはみいひて。へといふもの稀なり。されども二つの内。へと稱するハ夷人の古言なして。ワツカと稱するを近き頃よりの詞なるよし。老年の夷人はいひ傳へたり。是等の事夷地なしてハ。其古言を失ひ。却て奥羽并ニ松前の地ニ傳へさるゆゑ。古を奥羽の地も。夷境ニ均しき事を證ずべきなり。

碇の事を。夷語ニカイタと稱ス。其形鍵の如くなる木の兩方ニ。石をくゝり付たると。同じく土俵をくゝり付たると。唯据(スヘ)りのよき石のみを用るとの三種なり。カイタの語解ゞさし。

船を漕ときに腰掛る板を。夷語にショイタと云。ショを座とする事といひ。イタを板に事にて。座とする板といふ言なり。是を舟敷に上に横に入。船をこぐ時。是を左右にのぞら木にふみつけ。腰を此板にかけてこぐなり。

右七種に具る。舟の大小によりて。製作もまた大小なり。此具備りてより初て舟に乗る事なり。

上にいへる七種の具をとゝく備りて。海上幾走らんとすれば。水伯に祈り。海上安穏ならん事を願ふ。其祈る詞に。アトイ。カモイ。子ト。ヒリカノイカシコレと唱ふ。アトイは海といひ。カモイは神といひ。子トは風波

は穏らなるといひ。ヒリカノイカシコレも。前に云るごとく。海の神風波のおだやらかるやうによく守護たまへといふ言なり。右は祈り終りて。夫より出帆するなり。もべて夷人の舟を乗るも。おとり〳〵く法有ことにて。本邦の船師のことかる事ハならば。先舟を出さんとするにも。其日は天氣風波の善惡を考ふるは術もなり。船中にて忌み憚るの詞もなり。或も風波にのふときも。海神に祈るの法もあり。其外海上を走るといへども。凡一日に着岸なるやからざるやの程を計て。格別に遠く岸を離きて乗る事ハならば。常に海岸

ゐ添て走るなり。是ハ北方ハ海上風波のはらき事甚しきゆゑ。船ハ海上ゐ泊をる事を。夷人ハとゐおそれきらふゞ故なり。此外舟中ゐての事ハ。夷人をべて秘密ハ事となして。かる〳〵敷を人ゐ語らざるゆゑ。詳らならぬ事共多し。

前ゐ出せる舟敷ハ事を。夷語ゐイタシヤキチフと稱ハ。イタを板といひ。シヤキを船きといひ。チフを舟の事ゐて。板ゐき舟といふ言なり。とと舟ハ敷ゐるとかくいふゐハを。丸木をくりたるま〳〵ゐて左右ハ板をつけゞ。夷人河を乘るとゐろの舟とゐとならゞ。時ゐ

よれバ。其儘にて川を乘事も有ゆゑにかくもいへるなり。萬葉集に棚なし小舟といへるハこれなるべし。今に至りて船工の語に。敷より上につける板を棚板といふ。されハ棚板なき舟といふ心なるべし。今本邦ハ船の製作にかゝる敷の法を用ひざるハいつの頃よりなか有りんカシキオモキなどいふ事ハ船工ともハ製作に初りしなり。

カシキといへるも。オモキといへるも。少しつゝその製にかゝるたる事ハなほ遠ども。格別にたゞふ所を非ず。何遠も敷を厚き板にて作り。それに左右ハ

板を釘にて固くとぢつけて。本文にいへるイタシヤキチブに如くにあらず。夫より上に左右に板を次第に付仕立るあり。此製至て堅固なり。今の船工共用る法皆是なり。

其製の堅固なるを利として。專らそれのみを用ひしより。終に其法をも失ひし成べし。今奥羽の兩國并に松前等にてハなほ其法を傳へて。漁舟にハ[illegible]とぢ[illegible]。敷に右のイタシヤキチブを用ふ。是をムタマと稱せ。ムタマをムタマに轉語して。どうもなるさび棚板にき舟といふ[illegible]ろなり。其敷に左右の板をつけ。夷人

は舟とひとしく仕立たるをモチフと稱ス。モチフをモウイヨップの略よして舟は事なり。をべて夷地よしてハ。舟は事ハ千プといふ事。よはつ孫ゑ迄ども。其實をモウイヨップといへるゑ。舟の實稱よして。チプといへるゑ。略していふは詞なるよし。老人は夷をいひ傳ふる事なり。モウとを乘る事をいひ。イヨは入る事をいひ。プを器をいふ。乘たり入たりをる器といふ言よて。舟の事をいふなり。此語の轉し移りてモチフとを稱をる成べし。凡此等の事且ハ前よ出せる舟中は具のだときさふ〻ら夷地よ用ふるまゝなる事。

奥羽の兩國。及び松前ゝ存し殘りたる事をくなのらび。

俗ゝいふ丸木舟を製作をる事。イタシヤキチプとゝとゝる事なし。形の少しくたゞひて。緩き川ならびゝ沼等を乘る船と。急流ゝ川を乘船と二種ゝり。其急流の川を乘船ゝ。川の格別の高低ゝりて。水ゝ落る事飛泉ゝゞとくなるところを。さゝのぼる事等有とき。水の入らざるゞためゝ。舟の舳ゝ板をとゞ付るなり。

蝦夷ゝ地松前氏の領せし間を。其場所々々ゝオトナと稱をるもの。其身一代のうち一度づゝ。松前氏ゝ目

見ゑ出るゑとなりて。貢物を獻せし事なり。其貢物ハ積ところハ舟を。ウイマムチプと稱ス。其製作のさまよハつゑの舟ゑ替りたるなり。ウイマムを官長ハ人ゑ初てまみゆる事をいふ。チプを舟ハ事ゑて。官長の人ゑ初てまみゆる舟といふ言成べし。

老夷のいひ傳へゑ。古を松前氏へ貢をるゑとく。シヤモロモシリへも。右ハ舟ゑて貢物を獻したる事なりといへり。シヤモをシヤハクルハ略なり。シヤハをかしらたちをる事をいふ。クルを人といふ事ゑて。かしらたちをる人をいふ。ロを語助なり。モシ

りゝ島といふ。此儀ハとハ意味ゐる事なり。夷語ハ水ハ流るゝ事をモムといふ。地の事をシリといふ。モシリゝモムシリハ略ハして。流るゝ地といふ事なり。其故ゝ凡嶋ハ水上ハうこのびたるを。遠よりハぞめバ。流きつべき地のさましたるゆゑハ。嶋の事をモシリと稱せるなり。さきバシヤモロモシリとゝかしら立たる人ハ嶋といふ事ハて。本邦をさしていへるあり。古ハとき蝦夷といへどもハとゝく本邦ハ屬せし事故。本邦をさして頭の人ハ嶋と稱せしあり。其貢物を獻ぜしといへる事を。夷人の

云傳つたるを。いつゝもさゞら成事ゝや。日本紀の中ゝ此事を載たる所數ゝみえゝり。

ウイマムチプを粧ふ具三種なり。そのうちナムシヤムイタと。ウムシヤムイタとの二種を。前ゝいつるとおとならば。今一種トムシの義。いまゞ詳ならば。ウイマムチプゝ用る此粧ひの三種を。破き損ぜといつどもおとゞゝ尊敬してゆるゝせゝ。おし破れ損ぜる事なきゞ。家ゝ側のヌシヤサンゝ收め置て。みだりゝとりきつる事ゝならば。かくのごとくせざれゞ。かならぜ神の罰を蒙るとて。おとゝおそき尊ふ事ゝり。蝦夷

國志

刳木爲底。兩舷舳艫。合縫皆繩結。不使鉄釘。舳艫注流蘇乃割木之所製。兩舷置櫓。々數適舷長短加減之一人盪兩櫓。船却行甚駃。故棹手皆向船尾坐尾又置一大櫓以爲柁用。帆檣兩條掛席其間。卷舒不似我邦帆檣之自在。別置小舠一隻運載物於本船。一同我邦三板之用。蝦夷風土記

蝦夷人の舟ハ。釘を少しもつらふ事なく。藤ハ蔓なるひハ繩をてからみ。板ハそぎ目あるひハ少しの穴ハどを。皆なるひハ木ハ皮の類をて。つくろひ拵る事ハ

す。荒磯の場所へ行てハ。舟つなぐべき港もなき時ハ。舟を陸へ引上げ置くハ。舟ぢゝ薄くして釘を用ひざるハ。輕くして取ハつらふハ心やすし。又海上ハも甚ゞ浮やすくて乘よし。久しく圍ふ時ハハ繩を切ほどきて。船板を重ね。雨覆ひして置く事あり。乘べき時節ハ。又繩ハるひハ藤蔓ハてからみて乘るハとなり。北海隨筆

石狩の舟を所謂蝦夷船同製ハて圓木艇なり。船材ハタモと云木あり。但蝦夷舟圓木艇といへども。兩舷ハ各一枚の板を添て。舟底を深くはる者なれし。今日所

乘せ者ハ。一個ゝ圓木の儘ゝて船底甚淺し。然れども舟身を稍長し。大略横幅三尺弱ゝして。長さ殆ど七間もあるべきあり。尤大小一様あらず。觀國録

唐太島ゝ用ふる船も。夷人みづから造るものなり。良材なき島ゝれば。柳の類なるひを夷稱ヤエニといふものを以て。これを造るなり。其板をかハぎうすく軟弱ゝして。危きこと蝦夷船ゝまされり。其製造の事。船具のごときハ。蝦夷船ゝ異なる事なし。北蝦夷圖說

附唐太の船も。柳の丸木を彫て。その内ゝ梁をいれ。ひらのして用ふ。蝦夷松の根をほりて。釘ゝかゝ用

ふる事なれば。其船至て弱しといへり。休明光記附録

○弓箭製作の事

弓箭製作の事。同編巻五伎藝の部弓術の所ゟ併せて云り見るべし。

○百工

無陶鑄漆髹匠。獨長於彫鏤。自刀削刀柄揭須匕。皆彫鏤成文。文多作波紋魚鱗。亦好鏤巴文。工各有一種造意之章。不許它人作之。其鏤刻初不設範。隨刀成文。匀成自得其宜。地便漁獵者無良工。遠海閑暇無事者多善之。見今安子打地方。有最好手可玩。魚叉矢鏃皆磨所得。又製之

非別鑄成者。性亦長磨刀。雖至鈍之刀。一經蝦夷手。則水可以斬鮫。陸可以斬熊。蝦夷風土記

○鍛冶及鞴の事

唐太夷人ハ鍛冶を善とす。東地の夷人鍛冶を不知古き鉄類舟釘等を集めて。刄物をうつなり。もと山丹より習ひ得たりと云。鍛冶藥ハ昆布と土。その外都合五味合て鍛ふ也。地鉄ハ鋼となる。鞴ハ皮よて作り。一人して鼓ずるなり。小刀類ハ左刄なり。邊要分界圖考

唐太嶋夷鍛冶をなす事。蝦夷嶋近代なきところなり。

按ふ往古本邦の諸鋺物。蝦夷嶋よあまねからざる

時ハ。鍛冶して其用器を製せしなるべし。北地宗谷邊の老夷。其業を熟知せる者あり。近代ニ至つて本邦の諸物。漸々嶋中ニ偏くなりしより。其業廢せしもはならんか。

其業態他邦より傳へ來るもはなはだ。蓋島夷はた考得て自ら製せるところあるべし。鞴二種あり。一ハ魚皮を以て風囊を製し。一ハ水豹の皮を以て風囊を製ハ。鋏床ハ石面はた平なるを用ひ。鋏槌ハ本邦より交易ハヨリさいところのものを用ふ。其他斧はた類何ハよらず。打錚(テイサウ)はた用をなせものは。悉く持參て槌はた代りとな

也。其鍛練の法。本邦鍛治とかはらざることなく。それ鉄鋼をして打延ばさく。また鋏を繼ぎなどもする時ハ。其鋏ハ灰泥の類をふりて火中ハ入火鋏とかはり。凡刀斧の類。製し終て後。燒刃を付る事も本邦のごとく。水中ハ浸して是をあぶ。然きども鍛練の具備らざれバ。精巧の器を作るのさハ。其製するところハ悉く麤ハして可悅物ハし。北蝦夷圖說

○樺皮ハて笠等を製る事

北蝦夷人。甚ず不器用らしき者かきども。無造作かる器械等を作る。案外巧者なり。今朝キムンナイ出立の

時ハ見るバ。昨日同所逗留中。夷人樺皮を以て笠を作り。又ハ巨大ナル杓等を作る。僅一挺の小刀を以て。異様の物を細工をる事。殆ど内地人の及ぶ所ハ非ず。觀國録

蝦夷人ハ。雨降ても笠をハ用ひざるゞ。風俗ゝと思ひしゝ。笠も有るやと云ハ。答へをるハ。いゝハ我等とて雨ハ濡き。雪ハかゝりてハ。快をならされバ。昔より簑も笠も有るゝ。さきど其を作る暇あきゆゑハ。雨雪かゝりて歩行事なり。我ゝ山住ハきバ暇有故ハ。作りて用ふとて。又楡皮もて編たる簑を見せをるハ。頗る面白き物なり。又摺日誌

○煙管を製る等の事

此蝦夷國のさいくふて。きせるを作る事。尤細工ふ器用あり。日本國のならゝぎといふ木ふて。彼國ふを是をオンコといふ。中ふうつろなりて外堅し。かるゞ故ふ其枝をきりて。そのきせるの形をなさ。是我セレンボウといへるなり。さてまゝ日本人。此國ふ來りて。例の烟草持さるを見きゞ。能きたぞいふるゆゑ。少しもらひ得て。みふ打寄て是を味ふ事。又車はおとくふ座して。一人ふはセレンボウを出して。其煙草をはぎてひと口煙を吸。々なゞら傍ふるもはへまハる事。酒飲

時はだとし。幾度もかくをるゝとなるゝ。みゝ無言ゝ
う。先一人吸て傍なるゝはへ廻り時より。我方へまハ
を來るまでを。其煙りを口中ゝ含みて。廻り來る時ま
でゝ。やうゆく吐出を事ゝるゆゑ。いさつてゝづゝな
る事どもゝあり。此煙草入といふものゝ。木ゝてつくる。
其形大判はゝ形ゝて。高さ二三寸餘ゝゝ製を。扱脇へ糸
を付つゝゝゝ腰ゝ提て往來をる事。日本國ゝかをる事
ゝし。きせるゝ應じて製し。穴へきせるを通して。糸ゝ
てゝめ付け。腰ゝさを事なり。是等ゝつくる木を。種々
の木を用るゆゑ。定りさる事ゝし。其彫物又面白く。何

のゝさちといふ事もあく。彫刻ゝ至て奇麗ゝる細工なり。さべて此國の人小刀一挺ゝて。多種の細工をゝる事。一つの奇事なり。蝦夷見聞誌

○靴を製さる等の事

唐太夷人ハ。皮革をゝめゝ事を知る。是又山丹人ゝり習ひ得し所ゝり。其靴を製さるゝ。靴ハ滑し皮を用ひ。糸ゝて縫ひ脚半ゝ作り。海豹皮ゝて作る。ゝれをキテといふ。松前方言ゝ嶋足袋といふ。邊要分界圖考

○器械

○兵器の事

弓以圓木爲幹長三尺被藤蔓爲弦矢制二羽多用鶻鷹鹿角爲鏃削竹冐之傅毒其間別有鐵鏃不以爲漁獵之用皆磨小削而製之凡射物近而後發故射命中鎗亦傅毒雖鈍一鏦立死盔鎧連屬首冐之遂被全身皆以木造一種短刀由滿州來者名曰越木訖裝飾極麗不必用真刃猶本邦贄刀也蝦甚珍重不敢腰佩必掛之頸其直至貴典身三年僅得買一具至佳者雖典終身不能得之寺子酋有藏一古刀者相傳其刀能喫飯名曰安麻々越別打毋年復後用屠海鰌從此之後不復喫飯遂失其靈訖谷子有古盛一具既無頸項獨存號牌鐫八幡二字此皆

蝦中重寶。昭々著干東西部者云。刀裝之奇巧有呼蝦夷後藤。蓋方足利氏時。工人後藤助右衛門等避兵入蝦夷。居多革地焉。采金銀多制刀裝。後亂定稱載所制刀裝諸物去。船將開洋。蝦夷乘夜盡殺其人。剽掠其物。其物遂分散東西部。蝦皆知寶之。蝦夷風土記

兵器そ弓矢及刀を用ふ。其形殆と日本刀ゟ似て。其鍔ゟ銀片を纏ふ。おれを帶をるゟ。紐を以て腰ゟ結ぶ。矢筒亦紐を以て頸より右脇ゟ懸く。其弓モエスセンホウト

按ゟ秦皮なり。未ざ夷地有無をきかぜ。但弓材とな

もつかさバ。オシコといふ木ニ當るゞ。又夷人杜仲を用ふとも聞り。

を以て造る。其長さ凡五尺餘。矢は長さ尺餘芦を以て造り。

按ニ芦といふもはも。クマザヽはは竹なるゝ。其尖ニ黒色の毒膏を塗る。若し此矢ニ中るもはも。其毒は爲ニ死ス。彼等何ぞの地ニゆくといつども。弓矢と一刀を携つざる事なし。恒ニ此等はものを帶山林ニ入て。熊鹿ヱラシツ。

按ニ鹿の類。唐太夷名ツナカイ。魯西亞ニてオレン

と云なり。漢土ハ馴鹿と名く。又清一統志ハ我倫と譯せるもの。オレンハて。此エランツの事なり。及その他。我方ハそなき所ハ猛獸。及鳥類を射るなり。

邊要分界圖考

武器ハ弓矢劔鉾ハ類を用ふ。其劔の長さハ。都て皆大約日本の短刀ハ等し。兜ハ片板を以て綿布を狹み製したるものなり。おきを着さる形ハ甚異狀ハして。一笑ハ堪へざるゞ如し。亦一種の毒矢を用ふ。もし此矢ハ中るもハ死のきバ。其疵痊るゝとなし。性質常ハ戰爭ハ嗜む。然きども同類相爭て殺せ事なし。野作雜記譯說

土人等は鎧と云物有。革を漆ぬて塗りし小板を。皮もて縅さる物なり。其形桶の底おきゞ如く。後ゝ袖を結付る物と見えたり。按るゝ是打掛鎧の類ゝ。然るゝ破損して如何ともなし難し。六七十年前え。當山中ゝ餘ゝど有しゞ。今え五六領あらでハなしと。昔ゝ金銀を鏤しも有しとぞ。或人語るゝぞれゝ吾皇國古代の打掛甲は遺製ゝり。今脇ゝて引合せ脇盾といふを用るゝ。武内宿禰ゞ始めしと。明珍家ゝて云傳ふる由なるゝ。古き傳ゝあるゝや。又明珍家といふゝ。紀の辛梶の臣ゝして。世々鎧作るをもて仕奉りしゝて。辛梶ゝ韓

鍛冶ゐらんを。後書改めしゐらん。脇ゐて引合せる製。
韓製ゐて習效しゐや。姓氏録ゐ。紀辛梶ゐ。坂本臣と同
祖なりといへば。則武内宿禰の始めしといふも。據な
きゐもならざるゐ。又鎧を甲ゐ當るも。打掛て甲の
ごときといふより起りし物のといへり。頗るおもし
ろき説なり。されば此打掛鎧をおそく用ひし物ゐ。延
喜式兵庫寮ゐ。掛甲一領札百枚と有。まさ其傍ゐ冑と云
物なり。是も革の小札を縅して。頭ゐ尖りし笠の如く
ゐ作り。鞠も革の小札を縅さる物なり。まさ一種棋楠
樹の木もて。小札を甲冑共ゐ作りし物もなり。玩弄物

の様なれもひしげ。左なりりしや。本朝軍器考ふ。三代實録ふ。元慶の初出羽の國ふて。蝦夷ゆためふ奪とれし。戈具ゆ事ゑるさきしふ。甲冑の外まゝ鐵躰革躰ふど云物見えたり。それゞ中。本躰ゑ今も蝦夷ふゑ。其遺製なるなりと記せしゝバ。是も古るき物と思ゑる。天鹽日誌

蝦夷國ふ奇ふる兵器なり。夷語ショチキネと稱し。則矟の如きものゑれども。何國より渡り來る故をゑらゞ。通詞の言語ふゑ。戰ゆとき足ゆ甲を突といゝども。ゑらるやいなやをゑらゞ。長さ五尺五寸より六尺ゑ

のりまして。頭大まる丸し。其先まる刃なり。鋏あるゆゑ甚重し。其柄を木まて作りたるものもなり。その用ひ方つまびらかならぬ。まさスヅチといふ器なり。長さ三尺四五寸を限りとし。頭を杵はだいとくふとくして。所々アツシ甘糸まて巻たるものあり。是を戰ひに用ふといへども。又定かならぬ。其形よく日本國の鉄杖に似たれば。この甘辨慶の鋏杖に似せて。作り初めしものあらんといふ説なれども。然あるや否を知らぬ。まさハヨクベといふ器なり。鎧のうさちあるものなり。熊の皮まて製したるもはまて。其たどしの糸を。みな藤

のつら類なり。そのかゝち袖おき合羽ともいふべし。其袖のかくる所より口なく事なり。胸の中にて志め合せるものあり。その乳は上に。鉄もはにて紐を付る所なども。何の用ともえわれず。其襟に日本國の鎧は袖の鋏具なり。其丈三尺四五寸なりて。甚だ剛きものなり。横巾ひろげたる時は六尺餘なり。此器奥蝦夷國にて。タカラカウシともいふなり。またコンナといふ器なり。兜の如きものあり。是も何獸の皮にて製るも思ひくなり。其形四角なる紙は中程を以て。引志おきたる物はおとくして。其項に木にてつくりたるも

はを付さる物なり。紐をかのアツシの糸なり。又シツトケウ井と稱するハ。則小手といふ事なり。いさやの本なて製りたる棒と。筋ゞ祢のごとくくして。アツシなとゞ付たるものなり。スウチカムと稱するハ。則臑當の事なり。製しやうみな同じ。以上兵具といふものなども。其實否甚ゞ不審。蝦夷見聞誌

○古器の事

凡有罪者。出損珍寶以償其罪爲約者出之以代質所謂珍寶大抵以本邦古兵具爲寶甲冑刀劍及鍔其他刀裝以金銀裝飾觀美奪人目者重之如償罪各隨其輕重增

減其數雖至重罪無不可償者故蝦夷愆重之如重生命或埋之深山幽谷中雖妻子不得與知焉故没後失其所處者亦有之蝦夷風土記

蝦夷志曰金玉以不爲寶寶とする物ハ古の器物刀劍の類ふて盟約結信皆其寶を用て贖罪又如斯亦曰其寶ハ中ふ最尊重をる物ゑ狀燕尾ふ似て兩岐ふ鈴を掛く各一口是を地室ふ藏祈禱をる時ゑ祭る是をクハサキといふ此義なきふ所ならねど總てクハサキと云ふものふ不限日本の武器を甚尊重し神を祭ふ專ら供る而已クハサキを見るふ其製不同按るふ昔ハ

商人兜は鍬形紙。士の頭に戴貴寶ありと教。賣て商料を取り。名も鍬先と云ひ傳へたるものゝ。蝦夷は語るを聞くに。古代より夷地に傳へる正真はクハサキを。シコツといふ所の酋長の家に有。黄金あり。其餘も皆後代に至て求る物なりと。是全く蝦夷の好に隨ひ。商賈の輩數造り渡りしあるべし。其器名不同。頗る鍬形に似て。新きを木にて作り。銀にて文を置る物多し。蝦夷

拾遺

土人も總て寶物を山に隠し。我子にも教へぞ置。死期に子に教ふるおらをしなるゞ。若頓死せるや是を教

へば空しくはせし事往々あるなり。其と云も寶ありるを和人どもゑるや盜み防人ども役威もて貪取たとあるゞ故其寶を秘し置習ハしとおりしなり。其風箱館邊ゑも有し事ゑて錢を壺瓶等へ入埋置其を子孫へも教へぞして空しくはせしあり。文化度も錢龜澤村ゑて古錢一瓶を堀りし云々。西蝦夷日誌

久摺ゑ隣る十勝ゑ穴居跡三十餘有。土人を小人の跡と云り。是小人ならば古人ゞ穴居なる事此地のみならば。内地ゑも所々ゑて見さり。爰ゑ雷斧石土器の欠等出るよし。土器も全くを至て稀なりと云。傳ゑ往昔

鋏器はなき時え。此地鍋も土よて作り用ひ。野菜魚獸等の肉を切るよ。此雷斧を用ひ。家財を作るふは。石錐石鑿等は物有。人と擊合叩合等をる時ゑ。霹靂碪又え石槌等云有。是則神武記の異志都々伊毛智とをる物なり。鑲槌え令義解軍防寮よ。抛石とをる物よて。是ふ繩を附。飛礫よ擲は物なりと思える。其邊是等を作りし砥石と云物も。三つ四つ捨有けるゞ。其一つを船よ載て持歸りぬ。土人の言よ。我等ゞ法として。何一つ人間地より來らざるとて。事足らぬ事なきなり。未ゞ山中よゑ。烟管も木まゝ石よて作り用ひしゞ。追々濱近

く余等も住様ゝ成り。器財も衣服も奢侈ゝ成りて。今ゝ我等木綿を着。真鍮の烟管を持様ゝ成り。依てそれ丈土人の氣力衰へ。力も弱り質朴の氣も失行々りと。まゝ此地石鏃（シユマアイ）多く出るなり。何ぞも十勝石あり。十勝日誌

○金字兜の事

西部オクワコは郷の酋長。兜を一つ家寶とし。左龍頭なりと云々。他郷は冨長夷惜み。貴價を以て交易を請といつども。敢てきらず。故ゝ奪之。密らゝ岩壁を穿て納隠さとといつども。兜須臾ゝして歸り收ると云り。正八幡は金字なり。いづきの代いづきは人の甲といふ

事をえらび。又一異なり。北藩風土記

○エモンの事

エモンとて。山刀ゆうなるものを。夷人等を所持せり。常ハ帶せず。それある時を鞘り置くなり。此刀を蝦夷人の細工なてハなし。唐太渡りなり。銀地自由なつふゆうにゆゑ。大方銀の鞘りなれし。中身ハよろしこのらば。九寸九分ばかりなりて。鉛のごとく見ゆるなり。是地寶物なりとして。さらに用心向の爲なせざるなれなるべし。北海隨筆

○蝦夷象眼の事

蝦夷象眼といふ物有しが。今もあし。元來蝦夷人の仕出したるものゝいあらび。後藤の一類。畿内の亂をさけて。江州より越前へ渡り。夫より落來りて。産業もあきゆゑゝ。目貫縁頭を彫りて。夷人へ渡して。産物と交易おして。渡世さはせしおるべし。其もは蝦夷ゝのりしを。商舟のものゞも求め出して。重寶ゝせし故なり。此後藤といふもの。クンヌイゝ住たりしといふ。クンヌイゝ今も金堀屋敷といふのあり。又川上ゝ沼のありて金砂を流出。そは沼の水底ゝて。時ゝよりてゝ鶏は聲をたつといふ。甚いぶかしき說あり。然きども唐土ゝ

も。順天府の香河縣の百家灣といふ處なり。その水源を知る事あし。四時とも水つきず。むかしより住居せし人。百餘家有しが。皆水よりふきて淪没したり。今も猶風雨昏晦の時は。水中より鷄の聲なりといへり。此蝦夷象眼といふは。深山の夷人なり。今もまれより所持するものなりといへり。北海隨筆

○シユトは事

是をウカルを行ふの時。拷掠するに用る杖なり。シュトと稱する事は。もとの轉語なるべし。

本邦は語ふ。苔をもとゝ訓したり。

されを製するなり。いづれも木なれども。質の堅固なる木をもて製するなり。其形さまゝ變りたるなりて。名も又同じからず。ルヲイシユトと稱するハ。ルとそ樋をいひ。ヲイハ在るをいひて。樋の在るシユトといふ言なり。シユトの種類多しといへども。常なるものルヲイシユトのみを用る事なれし。夷人の俗。此具を殊の外に尊びて。男夷をいづれも一人に一本宛を貯藏する事なり。人によりても。一人にて三四本を藏するもあり。女夷にもまた。聊にても手をふるゝ事を許さず。かしらのところにルケイナヲを卷て。枕に上に

掛け置なり。又チセコルヌシヤサン棚の上ゑ納め置事もなり。旅行をする事などなどの迚ば。かならず身をそふさび。携へ持事なり。年久敷家ゑ持傳へたるなどゑ。人をたび〳〵拷掠なしたるゑよりて。打さるとゝろよ皮血等乾きはきて。いのゑをつよく拷掠したるさまゑ。なり。それをゝゝとゑ尊敬して。家ゑ傳へ置事なり。蝦夷國志

○食器の事

土人等ゑ樺皮を剥て。丸小屋を補理し。或ゑ是ゑ曲げ筐として飯をたき。又椀をも樺皮ゑて作るなり。其簡

便實ゑ奇といへし。石狩日誌

○土鍋の事

唐太ゟ内。字イナヲカルウシと云處ゑ。柳ゟ大木ゟ。其傍ゑ往來の土人削花を建て。拜をゑし行ゟとなり。其謂ゑ。昔此島ゑ鍋のなりし頃ダコイゑ住る婆々ゞ。土を以て始て鍋を作り。東浦ゟ土人へ其製を教へ。夫よりして南濱より西浦ゟ土人ゑも教へんと。鍋を背負此所迄越來りて。風と過て破りたりと。夫より意ゟ達せざるを患ひて。此處ゑて病ゑ罹り。終ゑ死せしと云り。其跡を今神ゑ祭り置き。此邊りの土人。往來の

時として。削花を奉りて。數日の途中の食粮を絶さじ。越さんとと祈り誓ふとぞ。如此其土鍋を。此嶋にて用ひしとと。昔は赤本話しの樣に思ひ居たりしが。今茲丁巳鎮臺堀君。御廻浦の砌に。クシュンナイにて土鍋を一枚。土中よりほり出せしとて。同所は土人獻せし由にて。持歸り給ひしを見侍り。余も始て土鍋を用ひし昔語りを信じぬ。唐太日誌

○酒瓶の事

北蝦夷新圖說に。滿州より易へ來る酒瓶二品あり。其狀一つハ萩を以て製したる籠なり。内面澁糊を以て

紙貼し。酒を盛る久しくして。敗損せ愁を見ず。大小種々ありといへども。大抵七八升より。一斗二三升を納る。一つゝ木を以て輪を製し。外面より澁糊紙貼して是を製せ。是も亦大小同じからぜして。大抵一二升より。三四升ばかりとぐまると云。千嶋志料

○酒器の事

酒宴よハ禮義甚厚し。仮初よも麤略なる事をせば。漸々と醉たる後も。崩せ易きやうなせども。是和せるの禮なりと云へり。各諷ひ舞後よも和よ過ぐ。騒々しき事もあるなり。扨器物の多きを雅ありとして。日本の

行器耳盤湯桶柄杓盃臺は類。都て金蒔繪の付たるを悦ぶなり。皆此酒宴の酒器ゟ用ゐる道具なり。時ゟ松前の者云ふ。留川長右衛門と云通詞。松前所在嶋の内ゟ。ユタカといふ漁獵の稼場所の乙名來て言ゆうゟ。近年も器物ゟ。何も珍らしき器物參らぜとかゝる。通詞長右衛門是ゟなづんて。何ぞ與へたく思ひ。因て松前表へ其旨を云送りけり。彼場所請負の主人。彼是と思ひ廻して。金めつきの金物付の狹箱を遣しけり。此箱の内ゟ。金箔紙ゟて張たる故。内も外も金光りゟ輝々り。長右衛門此箱到來しれば。急き其旨を彼の乙

名ヨ云遣してさて乙名ユタカヨ對面して曰此さび松前表より良器物到來せり因て呼ヨ志んぜたりと云ユタカ其品を見て大ヨ悅び天地開けてより如此珍しき物そよもなからじと思ひ勇み進て交易せり此代り物ヨ干魚類品々の價を出し其狹箱請取得さりかしたしと私宅ヨ持歸りたり私宅ヨ於て彼狹箱をつくづくと見てれもふやう唯今まで器物も多しといへども誠ヨ類なき器物なりとて大ヨ悅び珍寶と求め得さる高慢の意生じ此を弘めんと思ひ俄濁酒を造りて近村近郷の乙名長夷等我招き請彼器物弘め

の酒宴を始めたり。時に彼狹箱を持出して。濁酒十分に盛り。座敷の中央に閣たり。來客の乙名蝦夷ども。此器物を見て肝に銘し。古今に比類なき珍器なりと甚賞翫して譽そやしけり。酒宴も既に終ん頃に。彼狹箱も明きたれば。内を張さる金光紙皆もげ去たり。是を見て一坐の長夷を始め。大勢大に興を覺し。氣の毒ぞりたれば。莫大の代物と交易せしに。如此紛き物を以て。我産物を奪取さるならんとて。憤て頓て運上小屋に行き。通詞長右衛門に逢てユタカぞ曰。彼珍器ハ全く紛き物ならんと。濁酒を盛たきバ内悉くもげたり

と云。爰ゐおひて長右衛門。是と聞て大ふゐまり。全く以て紛き物ゐならば。彼器物々衣類を入る箱ゐて。水類を入る箱ゐてゑなき事と。能々詫びゑれば。漸々不肖せしとのや。代物莫大ゐ出して交易せし珍器物の。思ひ入の違たるより出て。只一途ゐ欺ゐきたりと。ゐうゐゐまうたる片意地と。領解させゐることそ思ひやらるゑ。都て蝦夷の器物等ハ。酒宴ゐゑ用ひ。外ゐ用ふべきゐ其品々なく。未ゐ人道ゑ開けざれば。器財ハ入る事なし。蝦夷草紙

○蝦夷笛の事

東部釧路ふてた。麌皮ふて笛を作り吹けるゞ。此地を樺皮以て作り用ふ。是以樺皮爲角。吹作呦々之聲。呼麋麌射之。金志まゝ葉隆禮の遼志ふ。夜半令獵人吹角倣鹿鳴。鹿既集而射之等ふ似たる奇と爲べし。天鹽日誌

○蝦夷琴の事

ニワフカル。一名ビヤヌ三線。上國の人是を蝦夷琴といふ。糸五筋なり。胴を箱ふしてくるものなり。趺坐して魚尾ゞ方を上ふなし。肩ふよせかけて。夷人淨瑠理歌等ふ合て。左右の爪を以てかきならし。調子といふ事をなし。かゝる夷人をおゞでゝら音を樂しむ事の

れバ。實ニ平天下のいちぢるしき事。尤尊き事なり。松前記

北蝦夷國ツサンといふ處ニ。四弦琴を彈ものなり。うさゞふらくハ。韃靼國より渡りたるものよといふ說なり。其かさち甚ミじゝくして。二尺四五寸其いと四筋ありて。まさ柱も甚さ別なり。其彈ときの音聲と考ふるニ。樂甚しき時ハ。聲ハ高下なりて。牛ハほゆるゞ如し。其歌なふといふ文句もなゝ迷バ。ふしといふもなし。唯おもひくゝおりさりうたふ事なりゝ。その用ふる時ハ。いつなるや我問ふニ。海甚荒くして潮逆ま

くゞ如く。岸など崩きたるふる〳〵折など。此琴を出して。男女とも泣く彈事なり。思ふに海潮をまつまおさむる由縁ともなるらぎと。或書にのせらきたるゆゑに。所々尋ねたきども曾て見せぎ。有事ハたしらなりと。ウラヤシベツ此通辭あるものかゝりたり。實に四琴の品。韃靼國にたる事も。聞傳へたきども。其唱歌いまゞ定らぎ。後の人知る事ならバ。此處にえるして。おろのなるたのと我つぎ給へらし。蝦夷見聞誌

○蝦夷器物の事

太刀ヱムシ　小太刀ヱムシホ

總て刀をヲムシといふ

柄イムシニ　甎ワウテ

頭シヤバ　鐺シキ

鍔セツハ　鉏ハマキ

鞘シリカ　接羽セツバホ

鋒シンコ　下緒イトリ

太刀は。皆本朝の衛府の太刀鞘巻。或は山刀等の古物なり。凡身はなし。金具は古代の江州彦根柳川の製と見る。皆昔は商人賣渡したるものなるべし。當世の商人此金具を稀に買取て。

蝦夷後藤と稱し。世間へ出せる事あり。今ヱムシとて。新に作り蝦夷へ遣せる。松前及び秋田淳代等の麤鍛冶に作らせたる。錄きくひなう。蝦夷其ふぶき事も。詳にもきども。そべて夷は風武器を重に重寶とし。是を不持者は。一家の主となること不能よより。求之といふ。兜の鉢腹巻の破きたるを所持したるものあり。具足をアヨッベと云。至重寶とし。

斧ムカリ　鉈ナタ

鎌ヨッヘ　鉞テウナ

鋸ノコギリ　鑿イビヨ
錐イキシヤフ　割刀
針　鉤
煙管　鍬
夷人の鍬。もと木叉枝を以て造る故ゑ扨と云。
鍋ミユ　盌タ・キ
和卓アツシキ　杯トキ
盞タカ　臺サラ
銅提イトニウ　匙笥
桶

以上も。凡商人より賣渡せ。日本製れものなり。

杓カツクミ　杼子カシユリ

箸チニエヘシヤリカ　繩ハリツカ

徽索シツシ　蒲筵シユウチナ

菅菰の類。各自作。ヤリシヤリ　蝦夷拾遺

松前志ふ。エゾヤツ、即箭靭なり。此器もとより北韃の産なり。其製薄板を合せ。四角ふ金具を設けたり。夷人れ製ハ。板を合せ其上を樺皮ふて包み。左右ふ紐を付て背上ふ負ひ。右手れとゞくを規矩とせ。皆北韃の製ふ倣へり。夷人手袖韈等の具を用ふる事なし。同書

ふ。エモシボ即蝦夷刀也。是昔日本足利に亂ふ。後藤に徒。松前ふ遁れ來りて。所作太刀なり。其金具も即夷地山中に金銀なり。故ふ其性正しく巧も亦妙なり。今僅りふ所存以て重器とす。本藩舊事記中云。渡黨者も亦是等に徒と共ふ。松前ふ來るとかろの武士ふして。勇猛不敵の將士殺さしたるなり。ゑ蝦夷人の懸刀といふハ。甚上品の太刀なり。エモシボあり。同書ふ。バラヲツフも。夷人に鎗なり。方俗或にタチといふ。夷鬪爭の時にいふおおよそ。猛獸に類を突くふも。必ず此物を用ふ。蓋しオツフとも。總してホコを云なり。千島志料

西夷地余市邊ふ云傳ふ。昔物語ふ。おの山奥ふ鍛冶ハ音をる故ふ至り見るふ。神靈集りて。タンネツフユモシを製ス。近づきけきバ神を鶴とかりて飛去。其所ふ多。太刀短刀をのまゝ獲たり。今ふ所々の酋長其ゞ家ふ秘藏ス。といふ。厚田乙名サカナといふもの語りき。

蝦夷土産

○唐太器械の事

鋏釜ハ大抵本邦より渡ス。とゝろの物を用ふといへども。奥地ふ至てハ。山丹製の物を用ふ。大小種々のうといへども。大抵其狀同じ。

地夷製さる所は土鍋なり。大さ徑り六七寸ばかりして。兩邊は握耳を。なべの内邊ふ設く。皮を以て製し。繩ふの〻用るものを。トナリといふ。其トナリを以て弦とな し。火の燒切せんことを恐れて樺木皮を纏つり。土鍋製造のことハ。林藏詳ふ此ふ載ることを得ば。夷言もと土鍋を指してトヱシユと稱さきども。鳴夷を是を忌てカモイシユと云。其事實を詳ふせざれども。神鍋と譯さ。

椀まゝ大抵本邦より渡りし物を用ふ。奥地ふ至て夷製のもはなり。

艙を。此嶋の專用とするところの物なして。其形蝦夷嶋ゟ異ス。繩を前ゟいへるトナリを用ひ。杖を木を以て是を造り。その末鋏を以て是を巻き釘を出す。履板(シタ)まさそへ用ふなり。

鎗を。本邦山丹の物を雜用ひ。柄長さ凡六七尺。異形の物なし。

此地弓矢は類。其他日用諸雜器。皆蝦夷嶋ゟて用る物とハとなる事なし。此蝦夷圖說

○小兒を入置器械の事

天鹽字チノミといふ所ゟ。子供を。木皮ゟて笹樣の物

を作り。是ゟ入置。樹の枝ゟ下げ有ゟ。其由縁を聞くゟ。風吹ゟ揺て快く寐ると。如此して育つる時ゟ。生長して丈夫ゟ成と。太古蝦夷地も皆是なりしゑ。當時絶て。北蝦夷オロツコ。タライカ。ニクブン。スメレンクル。山靼邊ゟ。其風遺迹りと語りけるゑ。余辰年彼邊ゟて見しものと。大同小異のみゝゝり。其風今千百里外ゟも及ぶ迹やと思ふも。番歸育兒。以大布爲襁褓。有事耕織則繫布於樹。較枝椏相距遠近。首尾結之。若懸牀然。風動枝葉。颯々然。兒酣睡其中。不顛不怖。飢則就乳之。醒仍置焉。故長不畏風寒。終歲赤裸。板縁高樹。若素習然。元次山思

太古詩曰嬰孩寄樹巔就水捕鵶鱸所歎同鳥獸身意復何拘與此大相類不可謂社番非無懷葛天之民也番社采風圖考

暗合と謂べし。天鹽日誌

空知郡乙名セツカウスの家ゑ止宿せる時。我輩ゑ頭上ゑのさり。赤子涕泣せるゑ聲聞えゝり。而して其居る所審からば。尚ほ耳を聳て聞所いよく頭上ゑして。坐席の邊ゑのらば。八方を見廻せども。赤子を置べきゑ場所。更ゑ見えざれバ。餘りゑいぶかしくおもひ。同僚ゑ問へども。是又我輩と同じく。其所在をしらぞとおさへ。不審ゑおもふ折から。戸主セツカウス何事か

るや。メノコに語るをみる。セツカウスの妻。速に爐の上に釣り置く處の棚

奥羽北海道に於て。俗に通稱する火棚なり。いづも臺所の爐は上に釣りたるなり。農家或は漁家に於ては。樞要の棚にして。日々働く所の濡たる衣類。股引その他一式はぬぎ物を。焚火の上にかけて。乾かすべき棚なり。

に。釣り下げたる。小さき美なる俵の如き物を取卸し。前にいふとおろのギナと云敷もの等を織る草茎以て拵らへたる。赤子を入置く器物なり。

中より躶体の赤子ハ生きて。七八ヶ月ばかり經ゝりと思しきを出し。乳を呑せゝれバ。忽涕泣を止め。而して母の懐を離き遊び。居る折ゝら。我人愛を加へたるゝ。更ゝ屈ゝる色なく。肥て色白く誠ゝ可愛の小兒ゝり。左もうれしゞゝ遊び。聊寒氣ゝるべき躰も見えず。其健康なるゝと驚くゝ絶たり。土人の常ゝ壯健なる事。是を以て推て知るべし。尚同家ゝゝ十一歳ばゝりを頭として。五六歳ゝ至る。三人のセカチなり。近傍土人の家ゝ使ひ。或ハ遊びゝ歩行ゝる等。雪中何き も跣足なり。上川見聞奇談

オロツコ。小兒を入置く器械あり。名をチヤクカといふ。小兒を縛し置事。當歳より二歳の間なり。よくなるく時を以て。チヤクカをも離つ期となせと。小兒を此チヤクカに結び付置きて。啼くときも其器のまゝ抱へて。乳を飲ませ。亦釣置くなり。此形林藏画く者と小異あり。チヤクカの製作も。北蝦夷圖說に見えたり。觀國録

○麻苧を仕懸弓は繩に用る等の事

勇拂字クツチセの邊より。畑にも別て麻を作るなり。其麻苧を皆土人仕懸弓は繩に用ふと。いづきの家に

ても。天井ゐは仕懸弓を一面ゐ積さるゞ。容易ゐらぬ數なり。一人ゝ獵夫ゐて。一冬ゐ取獲る鹿。凡五六十頭ゐ下らざるよし語る。又同所字ハツタルセゐて。星影明りゐ至るや。胡女樺明しを持て迎ゐ來りしゞ。我等を見て。其明しを犬ゐ含ませ置。先へ走り歸りしゞ。須臾の間。犬は其明りを含て。我等教導し程よく行しゞ。二三丁過て外の犬一疋きたり。夫と嚙合て。其明火を消仕舞たるも可笑事なり。東蝦夷日誌

○海馬皮を繩代ゐ用る事

海馬の皮を細く斷切りて。繩の代りゐ用るゐ。甚強く

して。年をふれども切る〻事なし。是ハ夷言ニトナリ
といふ。北海隨筆

○器具ニ關る草木の事

松前志ニ。樺櫻ハ有り。夷人此皮ハ藥品とす。山櫻とハ。素
より別物なり。亦邦俗のトチカバといふハ。山櫻ハ皮
なり。夷方是を鍋とする事有り。樺邦俗夷人共ニ。此木
ハ皮を必用ひものとす。夷地諸山をきて多し。松節此
物共ニ燈ニ代つし。又武用ハ一具とす。民用尤おゝし。
夷人樺皮を名づけてタツと云。
蝦夷草木志料ニ。ノボリベ邊の方言ニタツ〻。或云。萬

葉集ヨカニハ。三代實録ヨカバ。本草ヨ樺木。小葉圓葉
ハ異。及其皮數重相分るものあり。まゝ牢固なるもの
あり。夷人それ牢固なるを貴み。是を屋ヨ覆ひ。まゝ曲
て捲杯を造といふ。其相分るもハ。但火炬の料となる
ものみ。まゝ此樹より釀生せし耳を。アヘヲツカルと
いひて。引火の料となすといへり。
東夷物産誌ヨ。トベニと云木。松前人イタヤと云。カヘ
デの族をいふなり。其樹密理ヨして。白色甚不堅して
鏤め易し。夷人專以器物となす。蝦夷草木志料ヨ。享保
復言ヨ。野鷄楓と書り。此樹ハ種類。夷地ヨ多きとヨお

ほし。其葉紫蔦に似たるもの有。俗にオニモミヂといふ。まゝ五尖七尖のもの有。木芙蓉に似たるものあり。東部にてトキハモミヂといふ。冬月萎まぜ。大葉にして十餘尖はもの有。東都にてイタヤと云。夷中は刀把及諸器物おほくもこれ材にて造ると云。其木ホヾカシハなどにも似たり。此材夷中は鈍刀を損せぜ。沙流山中其種類數多なり。イクバシ。マキリ。タシロ等。柄鞘及杓子煙草入等の器類。皆此木にて作る。

東夷物産誌に。タツブ即樺なり。樹皮用をなせしと多し。常に用て火を發し。又是を曲て桶につくる。板を底

とねして水を汲む。まゝ曲て杓とねさもの。オカツクミといふ。又以て屋を覆ふ。其種類不一。多くハ小葉のものなり。吾邦俗是ヲオカビカバと云。ノボリベツ又大葉ハものなり。此真のカバの属なり。又圓葉のものハなり。

松前志ニ。シナ木字不詳。此木檀木ハ葉ニ似さう。玉篇ニ柽木皮可爲索と疑ふらくも此木ならんか。津輕ハ人ハ迷をマタといふ。皮を剥ぎて繩ニ綯ひ。或ハ舟をとゞる繩とさ。此物甚水ニつよく。釘ニ代用さべし。夷人ハ屋を造り。荷物をからげ。舟をさくり。諸物を調ふ

るものを皆悉く是を用ひ故に方俗は馬具より以下諸
は用具にも亦此物を第一とす此もの或は紙を製せ
べしとも云り いりぶならむ 東遊記附録に級といふ
木多し 皮を剥て蝦夷人アツシに作る 此木は皮嚢に
して鼠食をず 細くよりて至て強しといへり 盛衰記
に大佛殿造營の所に信濃國に多き級の皮むきおほ
せて奉らせし事有しと覺ゆ 此地此木至て多し
松前志に オンコ
オンコを蠻語なりと 三才圖繪に見えたり
或人云 是他國に所謂伽羅木と書りと 中略 家材となし

て朽がゝく。工匠好て家の土臺とす。木理たゞまやらゝして。葉は香き羅漢松ゝ同じ。木理もとより堅硬ゝし て。其色代赭はごとし。華人は所謂淡古銅色こゝなり。夷人是を弓材とす。まゝ他國ゝ此樹を一位木とも云ふ。笏ゝつくるゞ故なりといふ。又椋は字をサクは木といへる説なり。字彙ゝ椋音永。木可爲笏といへり。然ゝども。貝原氏ゞ大和本草の圖形ゝ據て考ふゝバ。其木松前のオンコと異なり。疑らくは別木なるべし。堂上方ゝて。桑ゝ用るものも亦此木なり。前栽ゝこゝ栽植て。佳觀可愛。山雀好て古の木は實を食ふ。赤くして

南天燭子に如し。夷方言オンコウラルマニといふ。欝金嶽（今云「センケンタ」の本名なり）此樹多しときけり。

或云。此木年久しく水みひたせるを。伽羅となるといふ。まゝ古弓を伽羅とせといふことあれば。別ふ符合せる考なり。

一工人云。此木むし深鋏色ゝ出さしむるゆゑ。帆立貝に灰を以て煎るゆ。甚妙なりと。

松前志ゆ。コブノキ他國にもものと同じ。木性臭木ゆ類せる惡木なり。五六月赤實をむすぶ。鳥ゝ迷ゝ食ふ。臭木に實より小なり。方俗此木を薪とせる事を忌む。藩

士工藤長舊云。東部は夷人。此木を取て葬禮の式に用。まさ此木を海中に入るゝこと我忌む。漁獵に害ありといふとぞ。

東夷物産誌に。シユンニ即黄楝なり。彼地にて夷人皮を剥ぎ截て。輪とし削りちりぞめて文をなし。婦人是を戴き。頭の飾とす。

蝦夷草木志料に。ウムザキナ。ミツカドカヤ。一名ミツドスケ。菁茅書經禹貢此三脊の茅也。彼國古へ酒を漉て。神に供せるもの是也。夷中は種を長大にして。まゝに産せるものと異なり。夷人とりて席我つくる。シナノ木

此皮をまじへて文飾とす。其名をアヤキナと云。此夷中薦席のけやゝきものなり。又その小なるを。チタルへといふ。おきをなべて用ふといへり。又白老邊よりムリ。茅此屬よりして堅靭光滑なり。夷人編て蓬となし。まゝ唐太の嶋夷編て囊をつくる。其製極めて密緻。其文まゝ數等。此我テンキといふ。千嶋志料

蝦夷風俗彙纂後編卷六終